

イラン地震災害派遣国際緊急援助隊の活動について

自治省消防庁国際消防救助隊総括官

小林恭一

はじめに

去る六月二十一日早朝（現地時間二二日深夜）に発生したイラン北西部を震源とする地震は、時が経つに連れて急激にその被害の大きさが明らかになり、イラン国政府から各国に対し救援要請がなされるに至った。

日本政府も、イラン国政府からの要請に応じて「国際緊急援助隊」を派遣することとなり、消防庁に対しても二二日未明、外務省から救助チームの派遣要請があった。

筆者は、急きよ編成された国際消防救助隊の責任者として「総括官」に任命され、図らずもイランに赴き救助活

動を行うチャンスを得ることができたので、本稿を借りて、イラン地震災害の状況と緊急援助隊の活動状況や建物構造等について報告することとしたい。

一 イラン地震災害の状況

新聞等で報道されているイラン地震災害の状況は、報道日時や報道機関によって様々であり、現時点で確定されたデータはないが、現地に行った者の感覚で各種の情報を取捨選択してみると、七月一日現在では、概ね次のとおりであると考えられる。

・地震発生日時

一九九〇年六月二十一日〇時二七分（日本時間二二日午前五時五七分）頃

・震源地

イラン北部山岳地帯 テヘランの北西約二五〇キロメートルの地点（図参照）

（注）

実際に現地で建物の崩壊の程度や崖崩れの様子（写真参照）を見た感じでは、山岳地帯のビルクよりむしろルードバールやマンジールの方が被害が大きいと思われるので、ルードバール近辺の土質の脆さ等を割り引いても、実際の震源地はもう少し西によっているのではないかと考えられる。

・震源の深さ

地表から約一〇キロメートル程度と

推定

・地震のエネルギー

イラン地震震源地付近図と救急隊の行動

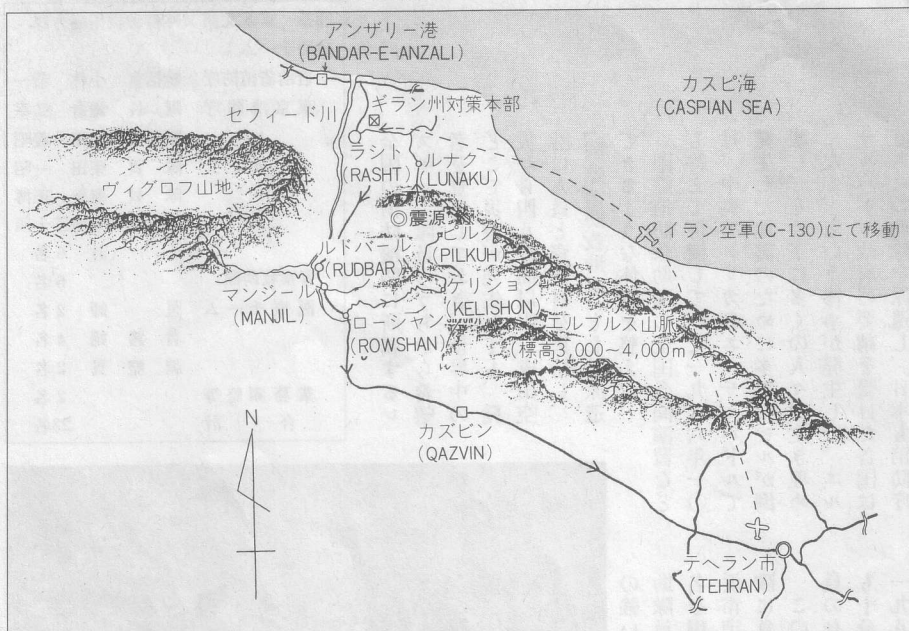


写真1

M7・6 (その後M5クラスの余震が多発)
 ・地震による被害
 死者 約五万人 (六月三日「テヘランタイムス」)
 負傷者 約二〇万人
 家屋を失った人 約五〇万人

二 国際緊急援助隊の活動内容

① 「国際緊急援助隊」と「国際消防救助隊」

一九八五年九月のメキシコ地震と同一年一月のコロンビア共和国ネバド・デル・ルイス火山の噴火泥流災害の際、

各国の救助隊が次々に現地入りし、競って生存者の救出に当たり目覚ましい成果を挙げていたとき、日本政府は、医療チームを除けば、とりあえず救済金と救済物資を送っただけだったため、日本のマスコミ各社は一斉に「日本もこのような災害時に国際救助隊を派遣するようでないか」と、とても大国とはいえない。日本政府は何をしているのだ」と報じて、救助活動に自信をもつ消防関係者を切齒扼腕させた。

これがきっかけになって、消防庁では一九八六年四月、

表1 国際緊急援助隊の編成

団長 富永文朗	外務省技術協力課		
救助チーム			
自治省消防庁	総括官	小林 恭一	
東京消防庁	隊長	鎌倉 弘幸	
〃	隊員	賛田 義昭	
〃	隊員	柴田 一昭	
〃	隊員	兼谷 正博	
〃	隊員	菊池三十四	
		計	6名
警察救助隊			6名
医療チーム	医	師	2名
	看護	婦	4名
	調整	員	2名
業務調整等			2名
合計			23名

全国の消防機関に所属するレスキュー隊員のうちから希望者を登録しておき、世界中のどこで災害が発生しても、発災から四八時間以内に成田空港に人員と資機材を集結し、「国際消防救助隊」として派遣できるような体制を整えた。

国際消防救助隊の全国合同演習なども終えて待機していた一九八六年一〇月、中央アメリカのエルサルバドルで発生した地震のために多数のビルが倒壊し、その下に多くの人々が生き埋めになる、という惨事が発生した。エルサルバドル政府の要請を受けた各国は直ちに救助隊を派遣し、日本も消防庁



写真2

の強い希望により、東京消防庁特別救助隊員を中心とする国際消防救助隊六名を現地に派遣し、追加派遣された横浜消防局の三名とともに、各国救助隊に負けない活躍をして帰国した。

この時点では、派遣される地方公務員の身分などに関して法制面で必ずしも十分でない点があったこともあり、一九八七年九月、外務省など関係一七



写真3

省庁により「国際緊急援助隊の派遣に関する法律」が成立し、以後は、救助医療、復旧など、被災国の要請に応じて総合的に「国際緊急援助隊」を派遣できる体制が整えられた。

その後、アルメニア地震（一九八八年一二月）など、国際消防救助隊が出動準備体制をとった災害は幾つか発生したが、被災国からの要請がなかった

表2 国際緊急援助隊の行動日程

月 日	時 間	活 動 内 容
6月22日 (金)	22時30分	・JAL421便で成田出発
6月23日 (土)	0時30分	・テヘラン空港到着 ・斉藤特命全権大使ほか大使館員出迎え
6月24日 (日)	2時40分 午前・午後 18時50分	・斉藤特命全権大使と打合せ ・イラン赤新月社との打合せ ・イラン空軍機にてギラン州ラシュトに向け出発
6月25日 (月)	午前・午後 15時40分 夜	・ラシュト現地対策本部、ギラン州厚生事務所と打合せ ・活動決定 （・救助チームは、マンジールでの救助活動 ・医療チームは、ラシュト市内の病院で医療活動 ・救助チーム、マンジールに向け出発 ・ベースキャンプ設置
6月26日 (火)	11時00分 午 後	・マンジールの住宅崩壊現場で救出活動実施 ・イラン側よりヘリコプターにより奥地の山岳地帯に入る可能性あり、準備待機の要請（要請は、夕方までなし）
6月27日 (水)	7時30分 9時50分 15時30分 夜	・フランス隊と救助に関する技術交歓実施 ・イラン側からの要請により山岳地帯のビルクに向け出発 ・ビルクの現地調査と技術指導を実施 ・第2キャンプ設置
6月28日 (木)	6時30分 17時30分	・ビルクでの救出活動実施
6月29日 (金)	午 前 午 後	・第2キャンプを撤収し、ラシュト経由マンジールに到着 ・ベースキャンプを撤収、テヘランに向け出発
6月30日 (土)	午 前 夜	・資器材の最終確認および整備 ・大使公邸で活動報告、大使主催の慰労会
7月1日 (日)	18時35分	・イラン航空800便でテヘラン出発
7月2日 (月)	12時00分	・成田着

② 編成

国際緊急援助隊は、表1のような編成で、救助チームと医療チームから成る総合チームである。これは、救助チームが瓦礫の下から救い出してきた負

③ 行動日程

国際緊急援助隊の行動日程は、表2

ため実際の出動にはいならず、結局今回の派遣が救助チームとしては初めての出動ということになったのである。

傷者を医療チームの医療行為によって救命しようという意図によって編成されているもので、救助チームだけ、または医療チームだけという単独編成に比べてはるかに強力な総合チームであるといえよう。

のとおりである。

被害が当初の報道よりはるかに大きいことが分かっていた二一日の夕方からの日本政府の動きは、各国政府と比較してもかなり素早いものであり、二二日未明には緊急援助隊を派遣することだけでなく、そのリストから搭乗する航空便まで決定されていた。残念なのは、一三時間余りで行ける成田へテ

ヘラン直行便が

週二便しかなく、

次の便までかなり

時間があいて

いたため、チャ

ーター便も含め

て全員が最も早

く行ける便を検

討しても、結局

ロンドンとフラ

ンクフルトで二

回乗り継いでテ

ヘランに入る二

二日二二時三〇

分発のJALし

かなかったこと

である。このた

め、成田からテ

表3 救助チームの活動内容

1 マンジールでの活動

- (1) 6月25日(月)夜8:00過ぎに、マンジールの軍の施設内にあ
る各国救助チームのテント村に到着。野営。
- (2) 26日(火)朝、「マンジールでの救出活動はほぼ終わりに近づ
いているが、マンジールの東側の山岳地帯に未調査の村が200以
上ある。現在ヘリコプターで調査中なので、生存者がいそうなら
行ってもらうから、待機して欲しい」旨イラン側から要請あり。
- (3) 待機中に、マンジールとルードバールの被害状況調査。キャン
プ近くのアパートの崩壊現場で救出活動。生存者発見できず。
- (4) 午後、「ヘリコプターで現地に入ってもらうかもしれないので、
すぐ飛び立てるように準備して待機してほしい」とのイラン側の
指示もあるも、結局要請なし。
- (5) 27日(水)朝7:30からフランスチームと双方の機材を展示し
て交流中、イラン側より生存の可能性のある未復旧の村が山岳地
帯の奥地でマンジールから90kmの地点にあるので、直ちに出発し
てほしい旨の連絡あり。村名「ピルク」、標高2,500m。
- (6) 10:00前、マンジール(標高1,500m)出発。武装兵士に護衛さ
れ、険しい山岳地帯をバスとトラック2台で山越え。路肩が地震
で地割れし、所々崩れている絶壁の淵の山道をぬけ、3,000m級、
4,000m級の山々を超えて、3:15、ピルクにたどり着く。ほとん
ど「アフガン・ゲリラ」の世界。

2 ピルクでの活動

- (1) 到着後直ちに現場調査。「生存者の可能性がある」という住宅の
崩壊現場を3つ程調査するが、生存可能性と2次災害の危険性か
ら判断して、救出対象を一件に特定。救出方法を定めた時点で日
没。いずれにしろ、建物のつぶれ方がひどいので、生存者のいる
可能性は小さいと判断。軍の補給基地で野営。
- (2) 28日(木)朝6:30、キャンプを出発。前日の打合せどおり救
出活動を開始。生存者がいることを考慮して、現地で調達したバ
ワーシャベルとブルドーザーを慎重に用いながら救出活動。
◎救助対象はシェリフィー家というバン屋。父母と子供3人、
祖母の6人家族。地震の際、母親と子供2人は逃げたが、残
りの3人は逃げ遅れた。祖母の遺体は一部発見されている。
父と子供1人が生き埋めとのこと。
- (3) 地震時に発生した火災が崩れた土砂に閉じ込められており、残
骸を取り除くうちに発熱を強める。放水して冷却をしながら活動
するが、発熱がひどく、このまま放置すると再燃火災となる危険
性があるため、救出活動を危険排除活動に切りかえる。
- (4) 17:30、高熱で遺体も白骨化してバラバラになっている可能性
が高いため、遺体搜索を断念。全員黙禱をして活動を終了。野営。
- (5) 29日(金)朝7:35ラシュトへ向けてピルク出発。

ヘランまで三十一時間を要してしまつた。

またテヘランに着いてからも、道路
が崖崩れで寸断されていたり、被害が
大きすぎてイラン政府の情報伝達機構
や意思決定機構が大混乱していたりし
たため、日本チームが軍用機とバスを
乗り継いで、最も被害の大きかったマ
ンジールの国際救助隊のテント村に入
ったのは、テヘランに着いてからさら

に四四時間後であつた。

この間に外務省とイランの日本大使
館およびJICA(国際協力事業団)の
担当者が払った努力は大変なもので、
同じ条件のもとでこれ以上早く現地入
りできる方法はなかったと思うし、救
助チームとしては感謝するのみである
が、「もう少し早く着いて活動したかつ
た」という思いがあることは否定でき

三 救助チ ームの活動 内容

二五日(日)の夜マンジールに入っ
てから、ピルクでの救助活動を終えた
二八日夕刻までの救助チームの活動内
容は表3のとおりである。
生存者の救出ができなかったことは
残念ではあるが、地理的なハンディに
もかわらず各国救助隊と前後して現
地入りして見劣りしない活動ができた

ない(もつとも、
崩壊すると土砂崩
れの現場のようにな
つてしまう建築
構造(写真2・3
参照)のため、日本
チームより少し早
く現地入りしてい
たフランスとイギ
リスの救助隊も生
存者の救出には成
功していないので、
結果は同じことだ
つたと思うが)。